

序 文

臨床アレルギー学の進歩は、気道アレルギーの診断やその周辺疾患ないし現象の解明に大きな役割を果たしてきた。また大気汚染による気道粘膜の障害を論ずる上にも、強力な理論的背景となつていく。それ故、気道アレルギーの発症機序を理解し、さらには地域的な該疾の特徴や頻度、あるいは大気汚染の影響などを十分把握していることが、実地臨床にたづさわるものにとつて必要である。

さてアレルギーあるいはアレルギー体質という言葉は医学の面ばかりでなく社会現象の説明の中にも多く使用されるようになってきた。しかし医学の面でのアレルギー学の発展は近年瞳目させるものがある。この発展を抗体の側からみた場合、各免疫グロブリン特にIgEの発見によりアレルギー学は飛躍的に進歩した。抗原の分析も具体的に進められてきた。そして抗原抗体反応の場とそれに継起する一連の反応の背景も概念的なものではなく実験的に確かめられている。

これは電気泳動、超遠心法、クロマトグラフィー、アイソトープの開発などの技術的発展に支えられてきたことは勿論であるが、また高度経済成長に伴う公害などをアレルギーの立場から追求する必要のあつたことにも注目すべきである。

近年耳鼻咽喉科領域におけるアレルギーに関する研究報告や病型の検討などが多くなつてきている。鼻科学臨床にたづさわるものは体系づけられつつあるアレルギー学を基礎にして公害、疾病などとの一つの接点を作ることが今後の研究また臨床上にも重要であろう。

本特集号は気道アレルギーとその周辺疾患さらにはその診断、治療上の要点、大気汚染との関係、IgE抗体研究の進歩などについて、各分野のアレルギーが分担執筆したものである。鼻アレルギーに関しては、三大抗原（屋内塵、花粉、真菌）によるそれぞれの臨床像が詳述されている。本号ではとくに鼻アレルギーを気道アレルギーの概念に立脚して理解していただき、日常診療にただちに役立ち得るよう配慮した。

編集委員